

誕生から来年150年を迎える札幌の消防の歩みを見てみよう

1872

「御用火事」を機に生まれた消防組織

人々が住む草ぶきの仮小屋での失火が野火となり、他の建物に燃え広がるなど開拓の妨げになっていた。開拓使判官・岩村通俊は、火災に強いまちづくりを進めるため「御用火事」を決行し、官設の仮小屋など150戸を焼き払ったという。この際に民家への延焼を防ぐため、初めての民間消防組織「中川組」が誕生した。



北海道大学附属図書館所蔵

▲明治10年代の札幌消防組

1894

消防組が公設の組織に



▲札幌消防組演習状況 (出典：昭和5年刊「消防大会記念写真帖」)

明治25(1892)年5月4日の夜、南3西4付近で発生した火事により、警察署や裁判所が燃えるなど、市街のおよそ5分の1に当たる887戸が焼失。2年後の明治27(1894)年に消防組規則が公布され、消防組は公設の組織となり、設備の増強などが進められていった。

1927

消防本部と望楼が完成

常備消防体制の整備に向けて、昭和2(1927)年に消防本部庁舎と、市内を見渡せる望楼を大通西1に建築。望楼は高さ約43mで当時は東洋一といわれていた。昭和40(1965)年に解体されるまで、札幌を象徴する建物として親しまれ、「消防組の核」としての役目を果たした。



札幌市公文書館所蔵

◀創成川のほとりから空に向かってそびえる望楼は画家の画題としても好まれた

1948

自治体消防体制が開始

消防組織法が施行され、市消防本部が発足。同年、市火災予防条例が公布され、消火だけでなく、火災の予防活動にも重点が置かれることになった。

1968

消防音楽隊を発足

昭和32(1957)年に発足した市の消防本部ラッパ隊に代わり、市民と消防を結ぶ「音の架け橋」として、昭和43(1968)年に市消防音楽隊を発足。現在も市内のイベントなどに出演し、防火・防災の普及啓発などの広報活動を行っている。

1991

消防局に航空隊を新設

消防ヘリコプター「さつぼろ」が配置され、広域での活動が可能に。平成23(2011)年の東日本大震災では、仙台市荒浜地区で被災者を計236人救出。また、平成30(2018)年の北海道胆振東部地震では、厚真町幌里・幌内地区などの被災地で計13人を救出した。

▶令和元(2019)年、東日本台風で救助活動を行う航空隊



札幌の歴史
あれこれ
No.11

【札幌の安全を守り続ける消防】
今や197万人以上が暮らす街へと発展した札幌。ここでは、これまでの札幌の歩みを、さまざまな角度から見ていきます。
問い合わせ 広報課 ☎(11)2036

